
魔法戦記リリカルなのはForce白き魔装竜

冥府の死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはForce 白き魔装竜

【Nコード】

N9155R

【作者名】

冥府の死神

【あらすじ】

「JS事件」より6年後の世界平和に暮らして一人の少年はある日全てを失い、スバル・ナカジマによって孤独から救われた少年トーマと出会う物語は此処から始まる。

キャラ紹介

レイヴン

年齢 17 歳

身長 165

髪の色 黒

体重 55

性格は優しく明るい性格

特技、家事全般、釣り、家庭料理、山登り

好きなもの、辛いもの、甘いもの、読書、

嫌いな物、怪談、苦い物

ステータス（なのはと Fate 風）

筋力：C（A A A +）

魔力：A A A

耐久：B（S S +）

幸運：B +（A A A）

俊敏：B（S S）

（ ）はバリアジャケットを展開した時

デバイス名前フューラー

バリアジャケットはバーサークフューラーですね

近距離戦闘技能：A A +

中距離戦闘技能：S +

遠距離戦闘技能：S S

空中戦闘技能：A

陸上戦闘技能 : A A

命中技能・能力 : A A +

回避技能・能力 : S +

空間把握能力 : A A A +

1話

とある田舎町

郵便局と思わしき場所で一人の少年が一通の手紙を出していた

シスター「はい・・・ミッドチルダ宛ての電信絵ハガキの送信ね。」

???「ういっス」

シスターの言葉に少年は答えた

黄土色の髪と青い瞳をした活発な少年である

???「送り先は港湾警備隊所属のスバル・ナカジマ防災士長様の元で間違いありませんね？」

念のために聞いてきた局員の言葉に少年は頷いた

シスター「それでは、最後にお名前を確認をします。」

シスターが最後の質問に出た

それに少年は応える

トーマ「俺はトーマ・・・トーマ・アヴェニールと言います。」

ステイード「自分はステイードと言います。」

ステイードが丁寧につ

シスター「旅行中？」

シスターが尋ねてくる。

トーマ「ハイ！」

トーマは元気よく言う。

シスター「いいわね。今日はどこまで？」

トーマ「この先の鉱山遺跡で宝探しと」

ステイード「写真撮影を」

ステイードが一瞬光り言う。

シスター「そう旅は一人旅かしら？」

シスターが尋ねてくる。

トーマ「ハイ！」

トーマは、元気よく言い外に出る。

前略スウちゃんお元気ですか？俺は一昨日からルヴェエラの文化保護区に入りました。

ワガママ言っただけ許してもらった。一人旅も

トーマ「ステイード到着は、夜になるかな？」

ステイードに尋ねる

ステイード「そうですねトーマ食料の準備は十分で？」

トーマに聞く

トーマ「当然！」

ステイードに言う

保護区内は、次元通信が不自由なのであんまり連絡できませんが、

俺は元気でやってます（ステイードに襲わって勉強もちゃんとやっています。）

約束通り旅行の間に世界を見て回って、自分の答えを見つけます。

トーマ「夕方か」

トーマは赤い夕陽を見て呟く

ステイード「夕食をしますか？」

トーマに聞く

トーマ「ああ」

トーマ達が夕食の準備をしていると、草むらから声が聞こえた

???「いい匂いだ。久しぶりのご飯が食えるよ！」

黒い短髪の青年が、草むらから出てきて言う。

???2「相棒」

小さな妖精サイズの白い髪の少年が呆れた表情で言う

???3「主」

小さな妖精サイズの黒髪の少女が言う

トーマ「あの貴方達は？」

草むらから出てきた青年達に聞く。

???「ご飯喰わせてください。」

トーマに言う

トーマ「いいですけど。」

「……ありがとうございます。」
トーマに頭を下げ感謝する青年

1 話（後書き）

こんな感じでいいのでしょうか、文章力ない自分ですが、これから
もよろしくおねがいします。

キャラ紹介2

ユニゾンデバイスヴァルホーク

ゾイドのバスターイーグル擬人化

白髪の少年

性格は良くも悪くも熱血漢。直感的な判断力・決断力に優れている一方、細かいことを深く考えるのは苦手。

身長はリインフォースツヴァイEEと同じ

？好きなもの：友情、肉、犬、ゲーム
嫌いな物ネコ

ユニゾンデバイスシャドー

黒髪の長髪の少女

ゾイドのシャドー擬人化

身長はリインフォースツヴァイEEと同じ

性格面倒見のよい性格でお人好しで、一度言い出したら聞かない。芯が強く、どれだけの悲しみに暮れても他人を慰め、前へ進むために笑顔を浮かべることができる後少々口うるさい

特技、掃除、裁縫

好きなもの、甘いもの、可愛い物、猫、鳥
嫌いな物、怪談、虫

2話

「???」ご馳走様!」

青年は両手を合わせて言う。

「???」ご馳走様だぜ!」

「???」ご馳走様です。」

二人も両手を合わせてトーマに言う。

トーマ「速い!」

この三人の食べる速度をみて驚愕する。

ステイド「彼女に比的する見事な食べ方ですね。」

三人を見ていうステイド。

「???」おいしい夕食を分けてくれて感謝します。」

黒髪の短髪の青年はトーマの手を両手で握手して言う

「???」一週間何も食べて無かったから死ぬかと思ったぜ!」

小さな妖精サイズの白い髪の少年がトーマ達に言う。

トーマ「一週間も」

その言葉を聞いてトーマは呆れた表情になる。

「???」自己紹介が遅れました、僕はレイヴン。」

「???」俺はユニゾンデバイスのヴァルホークだ!」

「???」私は同じくユニゾンデバイスのシャドーです。」

レイブン達はトーマに自己紹介する

トーマ「俺はトーマ・・・トーマ・アヴェニールと言います。」

ステイード「自分はステイードと言います。」

ステイードが丁寧につ

レイブン「トーマ良い名前ですね。」

トーマ「そうかな？」

シャドー「良い名前ですよ」

シャドーは笑顔でトーマにつ

トーマ「ありがとう。」

笑顔でシャドーに返す

シャドー「／／／／／／」

なぜか顔が赤くなる

トーマ&レイブン「?????」

不思議な顔をする二人

ヴァルホーク「鈍感だな。」

小さい声で言う

ステイード「鈍感ですね。」

ヴァルホークの後ろで言う

トーマ「片付け終了それじゃ此処でお別れだ、俺・・・向かう所が

あるから。」

焚火の火を消して道具を片付け目的適地に向かう準備をする。

ヴァルホーク「向かう所？」

トーマに聞く

トーマ「俺・・・この先の鉱山遺跡に行くから、レイブン達とは此処でお別れだ。」

レイブン達に言う

レイブン「偶然だね！トーマ僕達もこの先の鉱山遺跡に行く予定なんだ。」

トーマの言葉を聞いて言う。

トーマ「そうなんだ。」

トーマは3人を見て言う。

レイブン「トーマ一緒に行こう人数が多い方が楽しいよ？」

シャドー「一人のり大勢で言った方が楽しいですよ？」

トーマにいう

ヴァルホーク「大勢じゃないぞwww」

笑いながら言う

トーマ&レイブン「ハッハッwww」

二人も笑い出しながら楽しそうな表情で二人は歩く

シャドー「笑わないでください！！」

シャドーはトーマとレイブンに頬を膨らませながら二人に言う

トーマ&レイブン「ごめん」

二人はシャドー誤り

シャドー「良いですよ」

すぐに可愛い笑顔になり二人に言う

4人と一機のデバイスはそして、ルヴェラ鉤山遺跡に向かう。
そして少年トーマとある一人の少女の運命の出会い

2話（後書き）

次でリリースさせる文章かなりグダグダですが次回もよろしくおねがいします。

3話

数時間後

トーマ「おーやっと見えた。」

ステイード「お目当てのルヴェラ鉱山遺跡ですね。」

トーマ「うん」

トーマ達の目の前にはあちこちが崩壊した古い石柱と倒れている石柱そして岩石に囲まれた遺跡が見えた。

レイブン「でも、もう夜だね。」

空を見て言う。

シャドウ「野営できる場所でも探しましょう。」

トーマ達を見て言う二人。

トーマ「だな。」

レイブン「だね。」

ステイード「ですね。」

ヴァルホーク「そうだな。」

トーマ達は頷く。

数分後遺跡から一瞬光が見えトーマがそれに気づく

レイブン「どうしたよトーマ？」

トーマに尋ねる。

トーマ「先客かな、今明かりが見えたような。」

ステイード「こんなへんびな場所に？」

トーマに尋ねる。

レイブン「人の気配が確かに周りから感じるね。」
遺跡を見てトーマに言う

ステイード「どうしますトーマ？」

トーマ「様子を見てみようか。」

ステイード「了解」

ヴァルホーク「じゃあ隠れる場所を探さないとな。」
トーマ達に言う

シャドウ「あそこなら大丈夫だと思いますよ？」
遺跡付近に人が隠れそうな草むらがあり指を差す。

トーマ「じゃああそこに隠れようか？」

レイブン達に言う

レイブン達「了解！」

トーマ達は遺跡付近まで駆け下り草むらに隠れる。
其処には、銃器とアーマーをつけた武装した兵士達と科学者達が大勢いた。

女性「機材とデータの搬出は終了です、後はマテリアルですが」
女性は中年の男性に言う。

中年の男性「廃棄処分だここに捨てていく。」

女性「献体はともかくとしてシュトロゼックもですか？」
女性は尋ねる。

中年の男性「出来損ない一基にいつまでも関っておれんよ。
向こうでコイツの保有者を書き換えてなれば済む。」

中年の男性はケースに入れている黒い魔法書を目で見て女性に言う。

トーマ達はその状態を見て。

ステイード「引越しにしては物騒ですね。」

トーマ「関わり合って得はねーな。」

レイブン「そうだね。」

トーマに言う。

トーマ「このままこっそり・・・離れるか」

トーマ達はその場から離れようとするのとトーマが突然膝を着くトーマの頭に声が聞こえてきた。

????「痛いよ」

????「苦しいよ」

その声は少女だった。

ステイード「トーマ!？」

声をかける

レイブン「トーマ!？」

トーマの近くに行き声をかける。

トーマ「いててて・・・この声念話・・・!？」

トーマは激しい頭痛を我慢しながら言う。
そしてしばらくして痛みが治まる。

ステイード「私には何も聞こえませんでしたか」
ステイードは言う

レイブン「……………」

ヴァルホーク「……まさかトーマがあの念話が聞こえていたとは。」
念話でレイブンに言う。

レイブン「……予想外だね。」

トーマを見て念話で言う。

シャドウ「トーマさんはまさか!!」

念話でレイブンに言う

レイブン「そのまさかだね。」

念話でシャドウ達に言う

トーマ「あの奥……誰かが助けてっていつてる!!」
遺跡に指を刺して言う

ステイード「トーマあなたまさか!!」

トーマ「助けてって言ってる。」
遺跡をみていう。

ステイード「……………ですのねただ貴方が怪我でもすると、
私が彼女に怒られますので」

トーマ「オーライ相棒うまくやるさ」

シャドウ「トーマさん未来は残酷ですね。」

トーマを見て念話で言う

レイブン「仕方ないよトーマは、EC因子適合者なんだから、その宿命からは逃れない。」

トーマを見て冷静に言う。

トーマ「レイブン達はどうするんだい？」

レイブンに尋ねる

レイブン「僕達も一緒に行くよ」

トーマに言う

トーマ「それじゃ行こうか」

そしてトーマ達は、目の前の入り口から中に入った。
中には武装局員の姿があった。

トーマ「どうする。」

レイブンに尋ねる。

レイブン「トーマ僕の後ろについてきてくれない？」

レイブンはトーマに言う。

トーマ「いいけど？」

トーマ不思議そうな表情でレイブンに言う

レイブン「シャドウ」

シャドウ「ハイ」

レイブン&シャドウ「ユニゾン・イン!!」

するとレイブンが着ていた服が黒色になる。

トーマ「でどうする気？」

レイブンに尋ねる

レイブン「簡単だよステルスフィールド展開！！」

幻術魔法 使い言う魔法陣が現れトーマ達を包む。

レイブン「これで大丈夫！」

レイブンは言う

トーマ「本当？」

尋ねる

レイブン「僕の後ろについてきてくれないかな？」

歩きながら小さな声で言う。

トーマ「判った」

言う歩き出す二人は武装局員の目の前を通るが誰も気づかなかった。

ステイード「・・・凄いですね」

レイブンに言う

レイブン「そうかな？」

そしてトーマ達は、誰にも見つからず気づかれず遺跡の奥に入っていく、最初はかなり古ぼけた遺跡の山で普通の遺跡と変わらない道であったが中に入っていくとその雰囲気は、かなり変わり今では、トーマ達の周りはほぼ全体機械だらけの道だった。そして、

その周りには専門家じゃないと恐らく判らない謎の液体の中で浮ぶ細胞が見えた。それは人の脳に似た細胞と臓器似ている細胞だと思える物が浮んでいた。

トーマ「うお・・・っ！ここ研究施設・・・？」

ステイド「それもだいぶやばい方向の」
周りを見て判断するステイド

レイブン「恐らく違法研究所だと思うよ。」
周りをみてトーマ達にいう

???「痛いよ」

また少女の声がトーマに聞こえる。

トーマ「待つてて痛いのがすぐに止めてあげるから。」

トーマは扉の前に立ち魔方陣を展開して手を扉の正面に向けて置くと

トーマ「・・・解け」
言う

ゴウンという音がして扉が開く。

そして中に入ると其処には一人の美少女が壁に貼り付けにされていた。

この3人が出会う事で運命の歯車が動き出す。

3 話（後書き）

次で単子本一話が終わる長いなそしてリリーの会話が書ける!!
文章かなりグダグダですが次回もよろしくおねがいします。

P S 追加「この小説面白いですかね？読者の皆さんに聞こうと思います。

つまらないならつまらないで感想にかいてください
後脱字誤字がありましたら感想に書いてください
よろしく願います！」

4 話

そして中に入ると其処には一人の全裸の美少女が壁に張り付けにされていた。

トーマ「!？」

美少女を見てまた頭痛の痛みが先ほどのり強くなる。

トーマ「あつづ・・・つつ！」

トーマは膝をつき頭を右手で触る。

そして、突然警報が鳴り始める

中年の男性「侵入者!？」

中年の男性がモニターを見る。

女性「何者かがシュトロゼック4 t n に接触!それにこれは」

女性はモニターの映像を見て驚愕な表情をする。

レイブン「気づかれたか」

レイブンは警報を聞いて言う。

????「だめ、痛いよ、怖い、寂しいよ」

少女は念話でトーマに言う。

レイブン「・・・」

トーマを見ている。

女性「リアクトの反応!？」

女性はモニターの映像を見て言う。

????「来ちゃだめ」

少女は念話でトーマに警告する。

トーマ「大丈夫・・・泣かないで」

トーマは痛みを堪えながら、立ち上がるが眼球が少し出血しているがすぐに止まる。

そして、少女の表情が明るくなると壁に亀裂が入り今にも壊れそうになる。

トーマ「!!!」

トーマは少女の元に全力で走る。

レイブン「・・・」

トーマを見ている。

トーマ「間に合え!!」

トーマは少女所に辿り付き拘束具を外して少女をお姫様抱っこして走りだす。

そして、壁がガラガラと言う崩れる音がして崩壊する。

レイブン「トーマ!!」

トーマに声を掛ける。

トーマ「てて・・・大丈夫っ!?!」

トーマは全裸の少女をお姫様抱っこしている状態で尋ねる。

???「?」

少女は不思議そうな表情をしている。

トーマ「!!!!!」

全裸の美少女を見てトーマの表情は赤くなる。

レイブン「ステイド急いで服を探して」
レイブンはステイドに言う。

トーマ「き・・・着る物ステイドなんか服っ!!」
慌てた表情でステイド二言う。

ステイド「それらしきものならそこに」
ステイドは服を差す。

シャドー「トーマさん彼女一回降ろしてください。服は私が着させるので」

シャドーは服を持ちトーマに言う。

トーマ「了解!!」

トーマは美少女を地面に降ろしてすぐに後ろを向く。

シャドー「見ないでくださいね。」

シャドーはレイブン達に言う

レイブン「見ないよシャドー」

シャドーに言うと後ろを向いて見ないようにする。

ヴァルホーク「見るわけないだろう」

同じく後ろを向いてシャドーに言う。

だが二人は思った。張り付けにされているときに、
もう美少女の胸を見ていると二人は赤くなりながら考えていた。

その頃モニターを見ていた研究員達はザワザワしていた。

中年の男性「失態だ。」

その映像をモニターで見ていた中年の男性は怒りの表情でモニターを見ていた。

中年の男「安置室を熱焼却処分！シュトロゼツクと侵入者ごとだ！」

中年の男性は部下に命令を出す

警告、警告感性災害の危険発生これより熱焼却処理を行います。

突然トーマ達の場所に警報が鳴り始め出口が閉まり煙が放出される。

「焼却！！？」

トーマは驚愕した表情で言う

ステイード「困りましたね。熱いのは苦手です」

ステイードは困った声で言う。

レイブン「証拠隠滅するつもりだね」

レイブンは、表情を変えてヴァルホークに念話で尋ねる。

ヴァルホーク「映像録画するぜ」

念話でレイブンに言う。

レイブン「お願いするよヴァルホーク」

レイブンは、ヴァルホークに念話で言う

ヴァルホーク「了解！！」

言々と録画を始める。

レイブン「さてこの状況どうするか」

レイブンは考え始める。

近隣ブロックの職員は至急非難を

トーマ「手伝えステイード！」

ステイード「オーライトーマ」

トーマ「プロテクション！！」

トーマ達は言うところプロテクションを自分達の周囲に展開する。

レイブン「プロテクションでは無理だね」

プロテクションの中でレイブンは言う

熱焼却処分は温度が800 以上の状態で焼く。

それに引き換えプロテクションは500度から800度までしか防げない。

「カウント6・・・5」

トーマ「あのいきなり飛び込んできてこんなことになっちゃって本当にゴメン」

トーマは全員に言う。

「でも大丈夫きつと助けるから」

トーマは少女に言う。

レイブン「デバイスを起動させれば助かるけど後ほどが大変だから今は無理だし此処はトーマとこの子を信じるしかないか」

レイブンはトーマと少女を見て言う。

「4・・・3・・・2・・・1・・・」

次の瞬間少女が動きトーマの腕を持ち

????「誓約」

少女が呟くとトーマの右腕に腕輪が現れる。そして次の瞬間トーマ達が居る場所にバリバリという音がなりドオオオンと言う爆発音と爆炎が襲い掛かる。

中年の男性「やったか!？」

男性は映像モニターを見ている。

「プラズマアーク正常作動!」

中年の男性「いかなる防御をしようと人間が生存することなど・・・馬鹿な生きているだと」

モニター映像を見て言う

中年の男性「あれが完成したのなら!溶ける温度の中でも活動するっ!!そういうものを!我々は作り出そうとしていた。」

レイブン「成功か」

トーマを見て呟く

シャドー「ですが」

トーマを見て言う

トーマ「E C Divide Code 996セットアップディバイド・ゼロ」

トーマは大型拳銃に、大振りな銃剣を装着したような形状の銃を天井に向けて「なのは」のデivainバスター並の魔力砲を発射する。

ドゴツと発射音がすると土壁と天井をディバインバスター並の魔力砲が打ち抜く

ステイード「トーマトーマ」

ステイードはトーマに声をかける。

トーマ「んああれっ!!」

トーマは周りをみる。

ステイード「大丈夫ですかトーマそれになんです?そのイカした格好は」

ステイードは尋ねる。

トーマ「うおお!なんじゃこりゃあ」

黒い戦闘防護服に身を包み、髪と瞳の色が変化していた。

レイブン「まさかゼロが撃てるとは」

レイブンはトーマを見て呟く

シャドー「やはりトーマさんは」

シャドーは悲しそうに言う。

レイブン「100%ゼロ因子適合者だね」

トーマを見て呟く。

「???」

少女はトーマをじつと不思議そうな表情で見ていた。

トーマ「あっおお!!」

突然銃が光だしそして消えて右腕に腕輪が装着される。

トーマ「・・・あれなんだこの腕輪?」

トーマは腕輪を見てしばらくして少女を見る。

トーマ「ああごめん大丈夫？俺トーマ・アヴェニール名前聞いても？」

トーマは少女に尋ねる。

???「リリイです。リリイ・シュトロゼック」
少女リリイはトーマに言う。

トーマ「リリイいいねかわいい名前だ」

リリイ「・・・」

リリイは泣きながらトーマに抱きつく。

トーマ「と・とりあえず安全な場所まで出よう！ステイード周辺
チェック！」

トーマはリリイの肩に両手を置いてレイブン達とステイードに言う

レイブン「そうだね」

笑顔でトーマに言う。

ステイード「オーライトーマ」

トーマに言う

同時刻第12管理世界：フェディキア港

シャーリー「お疲れさまです。フェイトさんティアナ執務官押収物
には該当しそうな品ありませんでした。」

シャーリーはフェイトとティアナに報告する。

フェイト「そう銀十字もデバイダーもここじゃなかったか」

フェイトはシャーリーを見て呟く。

ティアナ「エクリプス」の感染者を出すわけにはいきません。」
ティアナはフェイトに伝える。

フェイト「うん」

ティアナ「もしも感染者が出たのならなんとしても捕獲しないと」
ティアナは言う。

4 話（後書き）

誤字とかありましたらよろしく願います。

5 話

管理世界の技術や文化のレベルは、世界な国によってさまざまである。

第1世界ミッドチルダのような先進都市もあれば、人と自然がともに暮らす辺境世界もある。

此処第23管理世界ルヴェラの文化保護区も、また古き良き暮らしを愛する者たちが暮らす地区。

移動も通信も極めて不自由ながら、都会を忘れ豊かな自然と過ごせる土地

第23管理世界ルヴェラの夜山の中

トーマ達は焚火をしている。

レイブン「トーマ交替だよ」

黒い短髪の青年はトーマに笑顔で言う。

トーマ「まだ大丈夫だよレイブン」

トーマと呼ばれた少年はレイブンに言う。

レイブン「トーマはもう少し睡眠しないと駄目だよ」

レイブンは折れた枝を火に入れていている。

トーマ「大丈夫だよ」

同じく左腕で枝を火に入れながらレイブンに返答する。

レイブン「今日は大変だったんだから、トーマは休まないと行けないよ」

トーマ「本当に大丈夫だよ」

トーマは一瞬目眩がするが気にしないでレイブンに言う。

シャドー「トーマさん絶対少し寝た方がいいです」

シャドーは、トーマを見て心配した表情で言う

ヴァルホーク「シャドーとレイブンの言うとおりだ少し寝た方がいいぜ。」

ヴァルホークはトーマを見て忠告する。

トーマ「本当に大丈夫だから心配しないでよ皆」

トーマはレイブン達に言う。

ヴァルホーク「無理している奴はいつもそ言う大丈夫だと」

ヴァルホークは鋭い眼光でトーマを見て言う。

シャドー「無理している人はよく言いますね」

シャドーはトーマを見ながら言うと水をトーマに渡す。

トーマ「大丈夫だから・・・何か急に眠たくなってきた」
水を飲みながら言うがトーマは凄い眠気に襲われる。

レイブン「トーマもう寝た方がいいよ明日も速いんだから」

レイブンは水を飲みながらトーマに言う。

トーマ「じゃあお言葉に甘えてレイブン・・・お先に眠らせて貰うよ」

トーマは歩き出しリリーの近くの木の所に座り寝始める。

レイブン「お休みトーマ」

レイブンはトーマを見て言う

トーマ「お休み」

トーマはレイブンに言うと静かに眠り始める。

それから数時間

トーマ達が寝ている場所には、レイブン達が居なくて周りに音を遮断する結界が張られていた。

かなり離れた場所の森の中には、大量の小型のヒョウ型とゴリラ型とカマキリ型その数合計で30機の

機械が、背部に回転して切り裂く爪が特徴の白いティラノサウルスの機械と戦っていた。

小型のヒョウ型「・・・」

背部のビーム砲を白いティラノサウルスに向けて一斉にビームの弾丸を放つ。

小型ゴリラ型「・・・攻撃開始」

左肩のビーム砲と右肩のミサイルを白いティラノサウルスに向けて一斉に発射する。

小型のカマキリ型「・・・」

背中のがトリング砲を白いティラノサウルスに向けて撃ちまくる。

その攻撃を回避せずに背部に回転して切り裂く爪から薄い紫色の何かを展開して、

攻撃を全て受ける白いティラノサウルス。

白いティラノサウルス「AZ185mmビームキャノンだけで十分だな」

白いティラノサウルスは背部に回転して切り裂く爪の基部から、

「なのは」のディバインバスター並のビームを小型のヒョウ型と小型ゴリラ型に向けて放つ。

ドゴオオオオオオン！！

ビームを小型のヒョウ型と小型ゴリラ型に当たると辺りに激しい爆音が周りに響く。

小型のヒョウ型と小型ゴリラ型が居た場所には巨大な爆発後が残っていた。

小型のヒョウ型と小型ゴリラ型の生き残り達がミサイルとビームで反撃しているが、

白いティラノサウルスのビームのほうに火力が勝っているために全て飲み込まれ。

ドゴオオオオオオオン！！という爆発音が聞こえ小型のヒョウ型と小型ゴリラ型が全滅する。

一体のカマキリ型は背後から奇襲カマで、白いティラノサウルスに襲いかかろうとするが、

その奇襲に気づき襲いかかろうとしたカマキリ型を、白いティラノサウルスは尻尾で、

カマキリ型を吹き飛ばす。

吹き飛ばされたカマキリ型は吹き飛ばされ。6本木が倒れた場所で機能停止する。

白いティラノサウルス「終わりだ」

森の中に隠れている。カマキリ型を発見して頭部から尾部までが一直線になり、尾部の放熱フィンを展開し脚部のアンカーを下ろして白いティラノサウルスと言う。

カマキリ型は最後の悪あがきで、背中のカトリング砲を白いティラ

ノサウルスに向けて撃ちまくるが。

背部に回転して切り裂く爪から、薄い紫色の何かを展開して攻撃を無効化していると、

白いティラノサウルス口部に黄色いエネルギーが集まりそれを口部から発射すると、

強力な黄色いエネルギーの砲撃が、カマキリ型に当たるとカマキリ型貫通して、

ドゴオオオオと爆発音が周りに響きカマキリ型は全機溶解していた。

ヴァルホーク「派手になったな」

ヴァルホークは白いティラノサウルスに近づいて言う。

白いティラノサウルス「ヴァルホーク結界は大丈夫？」

白いティラノサウルスはヴァルホークに尋ねる。

ヴァルホーク「最低出力の集束荷電粒子砲だから、結界は大丈夫だぜ」

ヴァルホークは白いティラノサウルスに言う。

白いティラノサウルス「トーマ達の方には？」

白いティラノサウルスはヴァルホークに聞く。

ヴァルホーク「シャドーに先ほど聞いたけど音は聞こえていないだつてよ」

ヴァルホークは白いティラノサウルスに返す。

白いティラノサウルス「よかった」

白いティラノサウルスは消えて黒い短髪の少年に戻る。

ヴァルホーク「しかし、連中今度はトーマ達を狙っているな」

ヴァルホークは真剣な表情で黒い短髪の少年レイブんに尋ねる。

レイブン「トーマはゼロ因子ゼロドライバー適合者は珍しいからね。

彼らにとっては欲しい一つなんだよ」

歩きながらレイブンはヴァルホークに言う。

ヴァルホーク「連中普通に禁法研究とかしているしな。」

ヴァルホークは返答する

レイブン「最近はおそこもあってにできないしね。トーマ達を護るのが厳しいね」

ヴァルホーク「そうだな」

レイブン達は溜め息をしながらトーマ達の場所に戻る。

5 話（後書き）

2 か月掛りました相変わらずの駄目作者なりに頑張っ て見ました
誤字、脱字、読みにくい所ありましたら感想によろしくお願いします

また小型のヒヨウ型とカマキリ型とゴリア型、分かった人が居まし
たら凄いですね

では次回もよろしく願います。

ソイド紹介（前書き）

メッセージで書いてくださいと書かれたので書きます

ゾイド紹介

バーサークフューラー

方大陸戦争期にニクシー基地にてライガーゼロの兄弟機として開発された鉄竜騎兵団の旗艦ゾイドで、外見はジェノザウラーに類似している。ライガーゼロと同じコンセプトで開発されており、ティラノサウルス型の完全野生体をベースとした事で、オーガノイドシテム搭載型ゾイドに匹敵するパワーを手に入れている。計算上の総合力はジェノブレイカーをも凌ぐと言われ、更に操縦性が極めて悪いジェノブレイカーよりも扱いやすい機体となっている。

後に開発されたヘリック共和国軍の凱龍輝にも本機と同種の素体が流用され、ガイロス帝国軍の型番EZ-049の他に「BF-02」のナンバーがあるが、これはバーサークフューラー02と言う意味（01は兄弟機のライガーゼロにつけられるはずだったが、共和国に奪取された故に、ライガーゼロイクス登場後も付けられなかった）。

本機種の最大の武器は、ジェノザウラー系統から受け継がれ、さらに高出力で口腔内に装備された荷電粒子砲と、背部に二基装備された「バスタークロー」である。荷電粒子砲は集束式と拡散式の切り替えが可能になっている。

武装解説にはないがアニメやゲームでは、荷電粒子砲と同時に背部のバスタークロー基部のAZ185mmビームキャノンの出力を口腔内に装備した荷電粒子砲並にまで高めて発射でき、荷電粒子砲も含めた三個の高出力ビームの同時発射の威力は絶大だが、機体固定アンカー使用時でも、後退してしまうほど反動は大きい。

所属 ガイロス帝国

ネオゼネバス帝国

バックドラフト団/チーム・ベガ（スラッシュゼロ）

チーム・サベージハンマー（フューザーズ）

分類 ティラノサウルス型

全長 22.7 m

全高 12.3 m

重量 127.0 t

最高速度 340.0 km/h

武装装備

荷電粒子砲×1

エレクトロンファンゲ

ストライクレーザークロー×2（前脚）

ストライククロー×2（後脚）

アンカー×2（後脚）

ストライクスマッシュテイル×1

荷電粒子ジェネレーター×3（尾部）

イオンブースターパック（背部）

バスタークロー（マグネーザー/Eシールド/AZ185mmビ-

ムキャノン）×2（背部側面外側）

ハイマニューバスラスター×2（背部側面内側）

バーニアスラスター×10

ハンマーロック

中央大陸戦争時代、ゼネバス帝国軍が開発したゴリラ型汎用歩兵ゾイド。アイアンコングの小型版と言ふべきゾイドであり、格闘能力が高い。

バトルストーリー1巻でゼネバス帝国のスパイコマンド・エコー中佐が、ウルトラザウルスを奪取する作戦で使用したエピソードが有

名。

ZAC2056年の惑星Zi大異変後も生き残り、第二次大陸間戦争ではガイロス帝国軍の機体として第一線に復帰することとなった。しかし、ハンマーロックの能力の高さに目を付けた帝国摂政ギンター・プロイツェン元帥の策謀によってガイロス帝国の正規軍である国防軍には回されず、彼の私兵集団であるプロイツェン騎士団（通称PK師団）にのみ配備された。ネオゼネバス帝国成立後は強襲戦闘隊に配備され、主力ゾイドの一つとして使用されている。

現行機にはカスタマイズパーツとしてCP-26 全方位ミサイルユニットが用意されており、これを装備することで空陸を問わない攻撃が可能となる。この仕様の呼称は特に定められていない。

なお、旧仕様機のコクピットは単独での飛行が可能であったが、現行機にその機能が存在するかは不明。

属 ゼネバス帝国（旧）

ネオゼネバス帝国（旧）

分類 ゴリラ型

全長 5.6 m

全高 6.7 m

全幅 5.9 m

重量 26.8 t

最高速度 180.0 km/h

武装装備

ハンマーナックル×2

誘導対空ミサイル×4

連装ビーム砲×1

バルカン砲パック×1

ヘルキャット

中央大陸戦争中期、ゼネバス帝国軍が開発したヒョウ型（ジャガー型と呼ぶ場合もあった）高速戦闘ゾイド。ヘリック共和国軍のRMZ-12 ガイサックに多大な損害を受け、奇襲戦の重要性を学んだことから誕生した。

元祖ステルスゾイドであると同時に、高速機の草分けでもある。砂漠戦を得意とするガイサックに対し、ヘルキャットは森林や山岳での奇襲戦を想定して設計された。特に脚部に施された消音機能とぎりぎりまで熱放射を抑えた排気システムは秀逸で、これにより敵に気付かれず接近できるため「密林の暗殺者」という異名を持つ。この技術は後にEPZ-003 サーベルタイガーに活用された。

ZAC2056年の惑星Zi大異変後も生き残り、第二次大陸間戦争ではガイロス帝国軍によって運用が続けられた。EZ-016 セイバータイガーとペアを組み高速部隊の主力となったが、基本設計の古さが目立ち、ヘリック共和国軍のRZ-009 コマンドウルフにまったく太刀打ちできないため、EZ-035 ライトニングサイクスが開発されることとなった。

旧仕様機のコクピットは単独での飛行が可能であったが、現行機にその機能が存在するかは不明。

なお、ヘルキャットが光学迷彩の機能を持つとする描写は、アニメ『ゾイド -ZOIDS-』が初出である。ゾイドバトルストーリー内においては、ゾイド公式ファンブック4巻でのEZ-054 ライガーゼロイクスと比較する記述で、初めて光学迷彩機能を持つことが明確にされた。

所属 ゼネバス帝国
ガイロス帝国

分類 ヒヨウ型

ロールアウト ZAC2034年

全長 13・2 m

全高 5 m

全幅 3・8 m

重量 24・0 t

最高速度 190 km/h

武装装備 小口径2連装レーザー機銃（胸部）

対ゾイド20 mm 2連装ビーム砲（背部）

複合センサーユニット（背部前方）

3Dレーダーアンテナ（尾部）

デイマンティス

アイゼンドラゴン

鉄竜騎兵団が極秘裏に開発したカマキリ型SSゾイド。ホバーリングによる長距離高速飛行で神出鬼没に行動し、集団で襲いかかる。前脚のハイパーファルクスは、大型ゾイドをも倒す威力を誇る。背面に装備されたガトリングには砲座が設置されており全方位死角がない他、小型機ながら戦場に人員を運搬する役目を果たしている。また、デイマンティス同士で連結し大型機に合体することも可能。

アニメ『ゾイド新世紀スラッシュゼロ』ではバックドラフト団所属機が多数登場する。

所属 ネオゼネバス帝国

バックドラフト団 スラッシュゼロ

分類 カマキリ型

全長 6・48 m

全高 7・2 m

重量 10・0 t

最高速度 370・0 km/h

武装

2連装バルカン砲×2

ハイパーファルクス×2

マルチアンテナ×2

ガトリング砲座

イオンブースター

6話

管理世界の技術や文化のレベルは、世界な国によってさまざまである。

第1世界ミッドチルダのような先進都市もあれば、人と自然がともに暮らす辺境世界もある。

此処第23管理世界ルヴェラの文化保護区も、また古き良き暮らしを愛する者たちが暮らす地区。

移動も通信も極めて不自由ながら、都会を忘れ豊かな自然と過ごせる土地

山の中朝

トーマ「うおおお！やった街が見えた！！」

トーマは高い岩場から元気よく言う。

レイブン「トーマは・・・元気だね」

腹の音を鳴らしながら空腹顔でレイブンは言う。

ヴァルホーク「元気・・・・・・・・」

シャドー「過ぎですね」

二人は同時に言う。

トーマ「こりゃまた絶景！」

ステイード「記念写真でもとりますか」

ステイードはトーマに尋ねる。

トーマ「お願いするよ」

トーマが言う

ステイード「了解」

ステイードは言うつと周りの自然の景色と街と海の写真を取り始める。

トーマ「そーいえばリリイ大丈夫？疲れていない？」

トーマは背中に乗せているリリイに尋ねる。

リリイ「大丈夫」

リリイはトーマに返答する。

レイブン「僕達は大丈夫じゃないよ」

腹の音を鳴らしながら空腹顔でレイブンはトーマに言う。

トーマ「街に着いたらゆっくり休憩をして何か食べようか」

レイブン「賛成！」

ヴァルホーク「賛成！」

シャドー「賛成です！」

3人は片腕を上げてトーマに言う。

リリイ「うんトーマ」

リリイは可愛い微笑みでトーマに言う。

ステイード「ここらは海産物が美味しいようです焼き貝に魚介のスープ」

トーマ「やめろー腹が減るー」

トーマ『リリイはあれからよく眠って眠っている間に少し泣いていた。』

あんな場所に捕まってたんだから、辛いこともあったんだろう。』
トーマは背中にリリイを乗せて考え事しながら歩く。

トーマ『正直な所この妙な腕輪のこととか、あの時のこととか聞きたいことは、

色々あるんだけどまずは安全な場所にたどりついて、

それからスウちゃんに連絡と相談をすることで、地方警防じゃロクな対応もしてくれねーだろうしな』

トーマは考えることをやめてリリイを見て。

トーマ「それにしても腹減った。リリイ！ちょっと揺れるけど走っていい？」

尋ねる。

リリイ「うんうん」

リリイは問題ないらし笑顔で言う。

トーマ「そんじゃダーッシュ」

トーマは走り出す。

「トーマ早！」

「トーマ待つてよ！」

シャドー「トーマさん待つてください！」

走り出したトーマに付いて行く3人。

6 話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしく願います。

次回もよろしく願います。

7話

第18管理外外世界イスタ

その場所は自然に恵まれて川も綺麗で何処にでもある平和な世界だが、今日は少し違うようだ。

何処かの村に巨大な爆発と倒壊した木の家が目立ち周りには警察と管理局の局員達が沢山いた。

局員達は人を運んで人を袋の中に入れていた。

村人の女性「たった二人だったよ。男と女の二人組あの二人がこの村を、

この土地の皆を本当にあつという間に・・・」

左目と額をぐるぐる巻きにされ子供を抱きか抱えた女性は説明する。

ティアナ「犯人はいつたいてどうやってこんな破壊を？」

ティアナは村人の女性に尋ねる。

村人の女性「男の方は奇妙な銃を持ってて・女は黒い本を――」
左目と額をぐるぐる巻きにされ子供を抱きか抱えた女性はティアナに伝える。

ティアナ「それはこんな・・・？」

ティアナ服から黒い本と銃剣が写っている2枚の写真を見せて女性に聞く。

村人の女性「それ・・・！！刀が付いているその銃！」

女性は写真を見て怯え子供も目を瞑りガクガク震えていた。

子供の目は完全にその写真に写っている物のせいで、恐怖を思い出したようだ。

管理局の局員「間違いないですね執務管」

局員の男性は近くでティアナに聞く。

ティアナ「はい九分九厘エクリプス保有者の仕業です。」

ティアナは考えながら言う。

管理局の女性局員「やはり例のフツケバインとかいう組織が……？」

管理局の女性局員が尋ねる。

ティアナは「これからその調査をしようと思います。生存者の搜索の方……よろしく願います」

ティアナは局員達を見て真剣な表情で伝える。

管理局の局員「ハイ」

同時刻第3世界ヴァイゼン首都海上橋

シャーリー「ティアナはもう現地入りしている頃ですかね……？」

シャーリーは車を運転しているフェイトに聞く。

フェイト「そうだね。もう調査を始めている頃かも」

フェイトはシャーリーに運転しながら返す。

シャーリー「広域捜査は私達がヴァイゼンからティアナがイスタから、

であのお二人がルヴェラの方に」

シャーリーはノートパソコンを打ちながらフェイトに尋ねる。

フェイト「うん」

フェイトは頷く。

「各地の捜査隊が動いてくれています、やっぱり手は足りませんねえ」

ノートパソコンを閉じてフェイトに聞く。

「手配はしているよ大丈夫後は、向こうが早めに動きだしてくれるといいんだけど」
フェイトは呟く。

同時刻第一世界ミッドチルダ海上

周りはカモメの鳴き声と海の音が聞こえ、広い海の空中に浮かんでいる戦艦、

LS級艦船ヴォルフラム のゴウンゴウンと鳴る音しか聞こえない。

LS級艦船ヴォルフラム の捜査司令執務室

「???」司令そろそろ記者会見に、出かけるお時間ですよ。」

青髪を見た目が中学生の少女が茶髪の女性八神はやてに教える。

はやて「うん」

はやては後ろを振り向かないで返事を返す。

「???」現状の担当案件も、この解決発表で最後です、これでやっと動けますね」

青髪を見た目が中学生の少女がはやてに伝える。

はやて「そやね。おおきになりイン色々よ 頑張ってくれたな」
はやては青髪を見た目が中学生の少女リインを褒める。

リイン「とんでもないです」

リインは微笑んで言う。

はやて「ほんなら行こうか、皆を待たせたらあかんしな」
はやては歩き出しリインに伝える。

リイン「はいですっ」

手にボードを持ちながらリインは言う。

第23管理世界ルヴェラ北部港町数時間後

トマ「すいません貝の焼き串5人分とここら辺りで次元通信はありますか？」

トマは貝焼き串を焼いている町人のおばちゃんに尋ねる。

町人のおばちゃん「次元通信？そんなハイカラなもんはここいらにやないねえ」

町人のおばちゃんが貝の焼き串を焼きながらトマに返答する。

トマ「あーやつぱそーですか」

貝の焼き串を見ながらトマは言う。

町人のおばちゃん「次元越えの郵便や電報を出したいんなら、山の向こうの教会で送れるよ。」

町人のおばちゃんはトマに優しく教える。

トマ「あ・・それは知っています。行きに出してきましたから。」

トマは町人のおばちゃん伝える。

町人のおばちゃん「はい貝の焼き串おまたせ早めに食べるんだよ」
町人のおばちゃんはトマによく焼けた貝の焼き串を渡す。

ト マ「ありがとうございます。」

ト マは町人のおばちゃんから渡された焼けた貝の焼き串を受け取り、

町人のおばちゃんに感謝して歩き始める。

ステイード「予想通りでしたね」

ステイードはト マに言う。

ト マ「まーな」

歩きながら返答する。

ト マ「とりあえずリリイの服と靴を買って教会までは歩いてもらうか」

ト マはステイードに歩きながら言う。

ステイード「ですね」

ステイードは頷く。

数分後ト マ達は広い広場に出て噴水の近くに座っているリリイとレイブン達を見つける。

ト マ「リリイとレイブンおまたせ」

ト マは言う「町人のおばちゃんから渡された貝の焼き串をリリイとレイブン達に渡す。」

レイブン「貝の焼き串美味いよ」

ヴァルホーク「貝の焼き串最高!!」

凄く速さで貝の焼き串の具が減っていく。

シャドー「美味しいですねリリイさん」

リリイ「??」

リリイとシャドーはゆっくり食べている。

トマ「休憩宿はそこいらにあるけど服屋はあるかな?」

トマは貝の焼き串を食べながらステイードに尋ねる。

ステイード「それでしたらあの辺りの一角が自由市場のようですよ
市場の方に向いてトマに教える。」

トマ「リリイ食べたら行ってみようか?」

トマはリリイを見て聞く。

リリイ「うんうん」

レイブン「僕たちが宿取っておくからゆっくり服選んでくればトマ」

食い終わりトマに言う。

シャドー「服選びは私に任せてください!」

自信満々にトマに言う

トマ「わかったよシャドーに服選びを任せるよ」

トマはシャドーを見て言う

そしてそれから数分後一旦別れることにした。

7 話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしく願います。

次回もよろしく願います。

8話

第23管理世界ルヴェラ北部港町自由市場

トーマ「おおけっこういろいろあるもんだ。」

トーマはリリイを背中に乗せている状態で自由市場の周りを全体的に見ている。

シャドー「良いお店が沢山ありますね」

全体の店を見ながらトーマに伝える。

トーマ「でも人が多いからこれは服屋探すよ大変だな」

トーマは周りを見てシャドーに言う。

シャドー「其処は私の出番です！」

言うトシャドーは小さくなり妖精サイズに変化させて、自由市場の中に入って行く。

シャドー「中々安い服で可愛い服が見つかりませんね」

空を飛びながら色々な市場を見て回ると黒髪の少女の市場を見つけ、値段と服を見て行くと。

濃い紫の髪の少女の所を見ると服と値段を他と比べて安いと確認して

シャドー「トーマさん見つかりましたよ！！！」

妖精サイズのままトーマに伝えるに行く。

トーマ「見つかった？」

トーマはシャドーに尋ねる。

シャドー「ハイ良いお店が見つかりました」

トーマを見て言うと案内を始める。

???「はいいらっしやゝい素敵な衣装にアクセサリゝ」

シャドー「あそこですよ」

シャドーは濃い紫の髪の少女を指してトーマに教える。

???「お！その仲良しさん 良い服あるよ見てって」

濃い紫の髪の少女はトーマ達に言う。

トーマ「えーとねこの子の靴と服を探しているんだけど・・・」

トーマは背中に乗せているリリイを見せて濃い紫の髪の少女に尋ねる。

???「はいはい！服と靴サイズはどんくらい？」

濃い紫の髪の少女はトーマに尋ねる。

トーマ「あえーと」

トーマは悩み始めた。

???「……ふむんじゃまずはサイズ測るっか！」

濃い紫の髪の少女はメジャーを出してトーマに尋ねる。

トーマ「あえーと」

トーマは焦る表情でリリイを見ていた。

???「よかったらヘアカットもやっているよ。服買ってくれたら特別サービス」

濃い紫の髪の少女はトーマに尋ねる。

シャドー「それじゃお願いします」

妖精サイズのシャドーがトーマの代わりに言う。

???「ありがとうねお客さん彼女降ろしてね」

濃い紫の髪の少女はトーマに言い近くに椅子を置く。

トーマ「わかった」

トーマは背中に乗せていたリリイを椅子に座らして降ろす。
数十分後トーマ達は後ろを向いていた。

???「はい完成・・・どーお？すつきりしたと思うんだけど」

濃い紫の髪の少女はリリイの髪の毛を少し切ってリリイに尋ねる。

リリイ「凄いさっぱりした」

リリイはトーマを見て呟く。

シャドー「髪切るよ上手ですね」

シャドーは濃い紫の髪の少女に言う

???「それほどもないよ」

濃い紫の髪の少女はシャドーを見て返答する。

トーマ「気に入ったって」

トーマは少女を見て教える。

???「イエイ」

少女は拳をグーにしたまま喜んでいた。

???「んで、このすつきりヘアと合わせると...この服も、
よりかわいいでしょ？」

濃い紫の髪の少女はトーマ達に聞く。

シャドー「可愛いですリリイさん！」

シャドーはリリイの周りをクルクル回りながら言う。

トーマ「あー可愛い可愛い」

パチパチ両手を合わせてリリイを見て言う。

???「気に入って貰えたら嬉しいなー」

少女は靴を持ってきて微笑んで楽しそうに言う。

トーマ「んじゃお代だけどいいの？こんな安くって」

トーマは濃い紫の髪少女に質問する。

???「まーあたしが、趣味で作ったものだし」

少女は小銭に入れの箱を出してトーマに返答する。

トーマ「趣味のわりには、随分上手だけど」

トーマはポケットから財布を出して少女に尋ねる。

その時に右腕の純銀をみた少女はの頭の中で、キュピーンという、何処かの某野球ゲームの主人公の音が響いた。

???「わお！綺麗なリング！これ純銀？」

濃い紫の髪少女はトーマの右腕を見て尋ねる。

トーマ「！」

トーマは顔から少し汗が出る。

???「彼女もつけてるよね。二人でお揃い？」

少女はトーマに質問する。

トーマ「あー」

困った表情で少女を見ている。

シャドー「そうなんです二人でお揃いになっているんです」

シャドーは少女に説明するが。

???「ん？コレつなぎ目はないけど、どーやって外すの？」

濃い紫の髪の少女はトーマに尋ねる。

トーマ『やばい』

シャドー『やばいです』

二人は同時に思った。

トーマ「ま…まあその内緒！はいこれお代ね」

トーマは少女に小銭を渡す。

???「お…えーなんか訳あり？力になれることがあったら……

…え、

おおっ！！ちょっとおつりおつりー！！」

少女はお釣りを渡そうとしたがトーマ達が走って逃げたため渡せなかった。

トーマ「あんがと服屋さん！縁があつたらまた！」

トーマは手を振りながら濃い紫の髪の少女を振り向いて言う。

???「どーいたしました」

少女は微笑んで言う。

8話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしく願います。

次回もよろしく願います。

9 話

夕方16時50分頃

レイブン「ふむ」

宿代を見てみた。

ヴァルホーク「此処が一番安いな」
値段を見て言う。

レイブン「此処で止まろうかすみません」

レイブンは休息宿の店長を呼んで宿の予約をする。
一通りの手続きが完了して二人は宿の場所で座っているとトーマ達
が歩いてくる。

トーマ「宿良い所取れたんだね」

トーマは座っているレイブン達に言う。

レイブン「値段と部屋も良いからね」

トーマを見て教える。

トーマ「中に入ろうか」

トーマはレイブンを見て言う。

レイブン「そうだね」

レイブン達は言うつと宿の中の自分の部屋に向かっ
ていき
自分達の部屋に着くとドアを開ける。中は少し普通の宿のり
広く
そこそこの広さがある3人ベッドが3つありテレビも付
いていた。

トーマ「本当に良い部屋だね」

トーマは部屋の周りを見て言う。

ヴァルホーク「何せ俺達が見て良い部屋だと思っ
たんだから当たり
前だろう！」

トーマに近づいて言う。

トーマ「そうなんだ」

トーマはヴァルホークを見て言う。

ヴァルホーク「とりあえず此处で一休みして明け方協
会に行こうぜ」

トーマ達に伝える。

リリィ「うん」

トーマ「そうだね」

トーマ達は頷く。

トーマ「やっと落ち着ける」

トーマはコートを脱いで言う。

リリィ「トーマ達は凄いね。いろんなこと知っている」

ベッドに座っている状態でトーマとレイブン達を見て言う。

トーマ「まあ俺ずっとたび暮らしたから」

トーマはリリィに説明する。

リリィ「ずっと?」

リリィは尋ねる。

トーマ「今回の旅はけっこう長め行つた先でバイトしたり、発掘品を売ったりとかしながらね」

トーマは布団の上に座ってリリィに教える。

レイブン「僕達は3人で旅という名の迷子だけどね」

レイブンはリリィに言う。

リリィ「そうなんだ」

リリィはトーマ達を見て言う。

リリィ「トーマはずっと一人?」

リリィはトーマに聞く。

トーマ「帰る所はあるよ。今は探し物を兼ねた一人旅だけ」

トーマはリリイに教える。

リリイ「探し物？」

リリイは尋ねる。

トーマ「んまあいろいろ見つければいいけど見つかったとしても、それを俺がどうするかは、まだわからないかな。まあその程度の気楽な旅行つつー所かな」

トーマはリリイを見て伝えるとリリイがトーマの顔に近づいて。

リリイ「トーマとレイブン達ごめんねありがとう」

リリイはトーマとレイブンに突然謝り。

トーマはドキッと赤面してレイブン達は慌てる。

リリイ「旅行中だったのに助けてくれて、

怖い目にあわせちゃったのに優しくしてくれて」

リリイは申し訳なさそうな表情でトーマ達に言う。

トーマ「いやあの！平気！俺の勝手でやったことだし！」

トーマは慌てて手を振りながらリリイに伝える。

レイブン「怖くなかったよ。たまにあんな事件に巻き込まれている

から、
僕達は！」

レイブンも慌ててリリイに言う。

シャドー「私達は気にしてませんよリリイちゃん！」

シャドーもリリイに伝える。

トーマ「俺もね昔優しい人に助けてもらったんだ。
だからいいんだリリイが痛かったり、悲しかったり、しないんなら
それが一番！」

トーマは親指をリリイに見せて伝える。

リリイ「うんありがとう皆」

リリイも納得して微笑んでくれた。

シャドー「なんとかやりました……」

シャドーは安心した表情で言う。

9 話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしく願います。

次回もよろしく願います。

PS30文字で、するとなぜか最初はいいですが後から、なんか微妙な所に付くんですね・・・なんでだろう

10話（前書き）

今回は夢の話が主です

10話

夜方00時00分頃

夜空の中一つの部屋で男女は睡眠していた。

レイブン「皆気持ちよさそうに寝ているね」

トーマ達の寝顔を見ながらレイブンは相棒の白銀のデバイスを触りながら言う。

???「今日の夜の空も綺麗だなレイブン」

白銀のデバイスはレイブンに言う。

「そうだね静かで良い月が出ているね。…あの人が居なかったら、僕は此处に居なかっただろうね。」

レイブンは窓の外を見て月を見て目を瞑りながら言う。

少し場所は変わり夢の中

周りは沢山の木に囲まれ周辺は洞窟の中に居るのでは言う位の暗さだった。

森の中で其処に住む生物達の声が周りに響き渡る。
だが突然空にヘリの音が聞こえ始める。

???「こんな森林の中で3人の人間を見つけるなんて無理だろう
おっさん？」

髪の色が赤色の若い青年はヘリを操縦しながら隣の黒い髪の中年のおっさんに言う。

黒い髪のおっさん「無理であろうがあらゆる任務を成功させるのが我々……だ。」

それに……は彼らに渡す物があるらしい」
中年のおっさんは赤色の若い青年に伝える。

赤い髪の青年ターゲットにか？なるほど不良運搬は何年掛かかるかわからないぞおっさん？」

赤色の若い青年は真剣な表情で言う。

黒い髪のおっさん「……管理局の任務とは言え嫌な任務だ」

おっさんは窓の外を見ながら少し寂しそうな表情で言う。

赤い髪の青年「俺ら下は上の言うことを聞かないと行けないというのがアレだな……」

実験で失敗したとはいえアイツは……良い奴だったのにな」

赤い髪の青年はヘリを操縦しながら地上を見て悲しそうに言う。

其処に管理局の局員からヘリに伝？が入ると

???「了解現場に向かう」

ヘリを現場に向けて急ぐ。

場所は変わり森林の中3人の人が居て車を止めて髪の色がボサボサ

髪青年は、

一人の黒髪の少年を木の影に隠して髪を撫でていた。

???2「此処を動くなよ・・・と言ってもお前は動けないんだな。」

髪毛がボサボサの黒い髪の青年は少年を見て言う。

???4「マスター！！管理局員がもうすぐ来ます！！」

赤い髪の少女は黒い髪の青年に伝える。

???3「教えてくれてありがとうな。お前も此処で待機しておけよ」

髪毛がボサボサの黒い髪の青年は少女に伝えるとゆっくり歩き始める。

赤い髪の少女「マスター私も・・・お・・・と・・・も・・・に・・・」

少女は何かを言おうとした瞬間突然眠気が襲いかかる。

少年「・・・・・・？」

少年は小さく呟きボサボサの黒い髪の青年に手を伸ばすがその手が届くことがなかった。

ボサボサの黒い髪の青年「悪いな・・・」

青年は言うつと真つすぐ進むと広い森の広場に出る周りは岩石に囲まれて、

人が隠れそうな場所が沢山あった。

夜空には森の広場には武装ヘリと武装局員200人近くが包囲をしていた。

「はああ……自由の代償は高いな」

青年は管理局の包囲網を見て呟くと青年の姿が赤い竜の姿になり何かを呟き

管理局の包囲網に一人突撃する。

その所で突然目が覚める。

レイブン「夢を見ていたんだな・・」

目を開けてレイブンは言う。

そしてトーマ達起きて外に出る準備をしていた。

いつの間にか服屋の少女が居たがレイブンは気にせずにした。

トーマ「レイブンどうしたよ？」

荷物を纏めながらトーマに尋ねる。

レイブン「気にしなでくれないかトーマ…少し懐かしい夢を見たんだ」

レイブンはトーマに言うとまた月を見ていた。
そして

レイブン「僕は友達ができたよ」

そう言って部屋を後にする。

10話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしく願います。

次回もよろしく願います。

11話

夜方23時52分頃

ルヴェラ鉱山遺跡

「???」襲撃があったのは昨日の夜。現状施設職員に死亡者はなし、

侵入者は経路の電子錠を警報をならさずに解除しつつ誰にも見つからず現場まで、

一直線連中にしては随分とあっさりしてるシグナムどう思う」

赤い髪の妖精サイズの少女は尋ねる。

シグナム「そうだな我々の任務はEC兵器保有者の確保だ。それが誰であろうと必要とあらば打ち倒して確保するだけだ。」

シグナムは天井を見てそう少女に言う。

それから2時間後ルヴェラ丘陵地帯1時25分

トーマ達は休息していた。

レイブンは周りを見はると言っこの場にはいない。

アイシス「まこーゆー野宿もたまになら楽しいよね。

管理局との追いかっこ込みっていうのもまた面白いしでなんで5人は追われてんの？」

トーマ「前にも言ったる心あたりはあるけど間違っただことはしてないって、」

トーマは木の枝を折りながらアイシスに教える。

アイシス「だからそれを詳しく聞かせてくれてもいいじゃん！
旅は道連れ世は情け！」

アイシスはジタバタしながら言う。

一方別の所では激しい戦闘が起こていた。

結界が貼られているので外にはその爆音は聞こえないが、

20分前トーマ達のり少しく遠い所で戦闘が行われていた。

1時5分頃

森の中で何かが突然爆発すると突然木の影から豹型の機械兵器が現れ
小口径2連装レーザー機銃（胸部）と対ゾイド20mm2連装ビ
ム砲（背部）で、

連続ビームとレーザー射撃を白いティラノサウルスに放つ。

その攻撃を回避しながら白いティラノサウルスバーサークフュー
ーは背後の川を警戒していた。

バーサークフューラー「川の中に何か居るな？」

川の中に何かの反応が先ほどから反応しているが一向に姿を現さな
いので気になるが、

今は目の前の敵を倒すことを優先することにした。

バーサークフューラーの周りには無人機の豹型の機械兵器5とベロ
キラプトルに似た兵器5と、
バッファロー型10がいた。

バーサークフューラー「今日はこの間のり少ないが中型が10体か・
・・・」

ビームを回避しながらいティラノサウルスは背部に回転して切り裂く爪の基部から、

「なのは」のディバインバスター並のビームをバッファロー型に向けて撃つが

数体のバッファロー型はそれを回避して他のバッファロー型が左右から同時攻撃を仕掛ける。

バッファロー型「・・・・・・・・」

背部（実獣の肩の部分）の重撃砲塔を左右約25度ずつ旋回させると、

沢山の実弾の雨がバーサークフューラーに襲いかかる。

バーサークフューラー「ち」

背部に回転して切り裂く爪から薄い紫色の何かを展開して、攻撃を全て防ぐが動けない所に、

背後の川から待機していたワニ型の無人機が川から突然現れる。

バーサークフューラー「当たるか!!」

バーサークフューラーの脚に顎で噛み突こうとするがバーニアスラストを吹かして上昇して、

その攻撃を躲してバーニアスラストを消してワニ型の無人機を顎ごと踏みつぶし

突然バーサークフューラーに赤い光りが周りにまぶしく襲いかかる。

ヘルキャット「……データ習得開始」

小口径2連装レーザー機銃（胸部）と対ゾイド20mm2連装ビーム砲（背部）で、

連続ビームとレーザー射撃を赤い光りの中心にいるバーサークフューラーに放つ。

ベロキラプトル「……………」

口腔内の機関銃を赤い光りの中心にいるバーサークフューラーに放つ。

バッファロー型「……………」

背部（実獣の肩上新部分）の重撃砲塔を左右約25度ずつ旋回させると、

沢山の実弾の雨がバーサークフューラーに襲いかかる。

ドゴオオオオオオン！！

という爆発音がバーサークフューラーの中心から聞こえる。

だが煙の中から深紅の閃光が現れ一瞬でベロキラプトルの一体を切り裂き

深紅色のバーサークフューラーが現れる。

深紅色のバーサークフューラー「バーサークフューラーブレイカーモード！」

背部のバスタークロー基部のAZ185mmビームキャノンが消えた代わりに背中には、

背部には機動力強化のための深紅の大型可変式スラスター「ウイングスラスター」が搭載され、

その両側にはEシールド以上の防御力を発揮する特殊チタン合金製の深紅の盾「フリーラウンドシールド」とその中には中型ゾイドを一撃で両断する力を持つレーザー刃「エクスブレイカー」が装備された。

その姿を見たバッファロー型とベロキラプトルは深紅色のバーサークフューラー包囲して、

同時攻撃を開始する。

バッファロー型「……………」

背部（実獣の肩上半分）の重撃砲塔を左右約25度ずつ旋回させると、

沢山の実弾の雨がバーサークフューラーに襲いかかる。

深紅色のバーサークフューラー「もうその攻撃は聞かない」

殊チタン合金製の深紅の盾「フリーラウンドシールド」から薄い紫色の何かを展開して、

攻撃を全て受け解除して頭部から尾部までが一直線になり、尾部の放熱フィンを展開し脚部のアンカーを下ろして、口にはすでに黄色いエネルギーが集まりそれを口部から発射すると同時に脚部のアンカーを、

少しじつ動かし回転しながら強力な黄色いエネルギーの砲撃を放っている。

ドゴオオオオオオオオオ

と爆発音が周りに響きその場所に一体だけバーサークフューラーだけが残った。

バーサークフューラー「はあはあ・・・」

深紅の姿から元に戻り解除してバーサークフューラーの主レイブンは木を歩く支えにしながら、
ゆっくりトーマ達の所に向かう。

それから30分後

1時35分頃トーマ達の方もアイシスとの会話が終わり。リリィとアイシスとシャドーは寝ていた。
シャドーだけは寝たふりだがまあ誰も気付いていないので二人を見ていた。

ステイード「今回のこれはこの旅を終りにする良いきっかけかもしれないねトーマ」

ステイードはトーマを見て教える。

トーマ「探し物も行き方を決めるのも途中で終わらせるのは嫌だよ俺は」

トーマはステイードに言う。

ステイード「生き方は何処でも見つけられますよトーマ」

ステイードはトーマを見て伝える。

トーマ「何度も言っただけが欲しんだ。あの日町が砕けて俺も死にかけて、

俺の大事なものが全部壊された。

ヴァイゼン遺跡の鉱山でのこと・・・あの時あの場に居た多分町を壊した誰か、

もう7年の前の公式記録で事故って断定されてることだ。

犯人なんかいなくてホントにじこだったのかもしれないけどそうじゃないかもしれない。

俺は本当のことを知りたいのか知りたくないのか昔のことを全部忘れていいのかわかるか、

探してるのは踏ん切りをつけるきっかけさ半年間の時間を決めて探すだけ探して、

それで見つからなかったら諦める。」

トーマはステイドに言うと草むらがガサガサという音がすると、レイブンが出てくる。

トーマ「お帰りレイブン随分遠くまで見周りご苦労さん」

トーマはスポーツドリンクを渡して言う。

レイブン「ありがとうトーマ」

スポーツドリンクを受け取りゆっくり飲見ながら言う。

ステイド「少しあたりを見回ってきます。貴方達を休んでくださいね。」

ステイドは言うゆっくり見周りに行く。

トーマ&レイブン「ああ」

二人は同時に頷き寝る準備に入る。

トーマ「・・・ごめん変な話を聞かせちゃったか」

トーマは落ち込んだ表情で寝ている4人に言う

リリイ「うつん寝ていたから聞いていないなよ」

リリイはトーマに精神念話で言う。

アイシス「あたしも」

シャドー「同じく」

二人は同時に言う。

トーマ「そうでもまあありがとう」

トーマは言つと寝る準備に入る。

それから5時間後にトーマ達は起きて歩き始め2時間後教会に辿り着く。

その場所にこれからトーマ達と彼との初めての接触

11話（後書き）

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろしく願います。

次回もよろしく願います。

ソイド紹介2（前書き）

前回に出たソイド紹介

ゾイド紹介2

カノンフォート

分類 バツファロー型

重装強行攻撃型

全長 14・8 m

全高 6・8 m

全幅 5・3 m

重量 55・0 t

最高速度 190・0 km/h

武装

装備 ビームホーン×2

重撃砲×2

4連速射砲

二連ガンランチャー

ジャミングテイル

第一次大陸間戦争時代、ヘリック共和国軍が来るべき暗黒大陸上陸作戦のために開発したバツファロー型突撃戦用ゾイド。小型ディバイソンとも言うべき機体で、背部に強力な重撃砲を装備し、角もビーム砲となっている。胸部は格納庫になっており、弾薬など物資を積むことが可能。尾は妨害電波を発することが出来る。

新ゾイドバトルストーリー掲載の第一次暗黒大陸上陸作戦から実戦投入されたが、配備直後から最弱機（旧シリーズ最後のゼンマイ駆動ゾイド）としてダークホーンのハイブリッドバルカン砲に2台同時に貫かれたり、ロジャース少佐率いるカノンフォート部隊が暗黒大陸の共和国軍前線基地でジーク・ドーベル、ガル・タイガーを中心とした高速部隊とギル・ベイダーに襲われて全滅するなど損な役

回りをさせられている。そういつた損害とZAC2056年の惑星Zi大異変で多くのゾイド同様、個体数が激減し第一線から退いたが、生き残りが第二次大陸間戦争の暗黒大陸（ニクス大陸）での戦いに投入された（ゾイド公式ファンブック4巻参照）。

バリゲーター

分類 ワニ型

全長 14.5 m

全高 4.4 m

全幅 4 m

重量 24.3 t

最高速度 陸上 150 km/h

水上 35 kt

武装

（新） バイトファング

AMD20mmビーム砲×2

地对空4連装ミサイル

スマッシュアップテイル

央大陸戦争時代に開発された、ヘリック共和国軍のワニ型水陸両用ゾイド。ZAC2031年のフロレシオ海海戦にて初登場。同時期に開発された海空両用ゾイドEMZ-19 シンカーには後れを取ったものの、旧式化したRMZ-05 アクアドンに替わって共和国海軍兵力の一翼を担った。

ZAC2056年の惑星Zi大異変後も生き残り、その後もRZ-037 ウルトラザウルスやRZ-033 ハンマーヘッドが登場するまで共和国軍唯一の海軍兵力だった。

バイトファングの威力は凄まじく、噛み付いて河川に引きずりこむ戦法を得意としている。帝国の主力海軍戦力であるブラキオスとは

中央大陸戦争時代は互角とされたが、ブラキオスが強化された西方大陸戦争以降は不利とされる。

ソイド紹介2（後書き）

次回もよろしくお願いされます

12話

トーマ「あー見えた見えた」

トーマは坂の上から教会が見える位置で言う。

アイシス「ほんとだ聖王教会の建物はどこの世界でもかわらないねえ」

アイシスは教会を見ながら言う。

トーマ「そうだな・・・」

トーマは教会を見ながらアイシスに返答する。

アイシス「・・・あれ？」

トーマ『この臭い火薬と血の』

トーマ「ステイード皆を頼む！」

トーマは異変に気づきステイードに言う

ステイード「ハイ！」

アイシス「え!!」

トーマ「俺中の様子を見てくる。皆は此处からなるべく離れてて」

トーマは言つと急いで坂から降りて走つて教会の扉を開けると教会の中は血と壁に付いた獣の爪で切り裂かれた跡とドアの破損が目立っていた。

トーマ「これは・・・シスター」

トーマは床に倒れている息絶えたシスターを見て悲しい表情になると

???「来るのが遅えよおかげでこんな胸糞悪い場所で、いらねえ殺しをするハメになった。

いいか坊主用件は一つだけだデメエが盗み出したディバイダーとリアクター、

両方纏めてこつちに寄越せガキの玩具にやすぎた品だ。

死にたくなきゃあさつさと寄越せ」

左手首に藍色の羽根のタトゥーをしている身長180センチの男はトーマに言う。

トーマ『藍色の羽俺がずっと探していた。』

トーマは男を見て心の中で呟く。

『セーットアップ』

トーマはディバイダー996を展開し構える。

トーマ「聞きたいことがある。ここをこんな風にしたのとシスター達を殺したのは、アンタか」

トーマは左手首に藍色の羽根のタトウーをしている身長１８０センチの男に 質問する。

「??? 「あん？」

左手首に藍色の羽根のタトウーをしている身長１８０センチの男は機嫌が悪そうに、

トーマを鋭い目で睨みつける。

トーマ「７年前にヴァイゼン鉱山を壊したのもアンタなのか！」

トーマは大きな声で質問すると左手首に藍色の羽根のタトウーをしている。

身長１８０センチの男は突然ガンソードをトーマに向ける。

「??? 「デメエな質問してんのはこっちだ・・・死ぬクソカス」

身長１８０センチの男はガンソードを発砲する。

ドゴオツ！という爆発音が周りに響き教会内も揺れて煙も発生していた。

トーマはいつの間にか男の右側に周り煙の中から出てきて、
ディバイダー９９６を斜めに薙ぎ払う。

「??? 「オラアー!!」

男はダンと飛んでトーマの斬撃を回避した後ガンソードを縦に振り下ろす。

トーマ「ハアアア！」

トーマも男と同時にディバイダー996を縦に振り下ろす。

ギリギリという音と共に二人は同時に離れると同時にガンソードを向ける。

ガンソード「フレッシュトシエル」

男が持っているガンソードがそう呟くと銃身部の周囲に生み出したエネルギー弾が現れる。

ディバイダー996「シルバーバレット」

トーマのディバイダー996が言つと同時に、環状魔法陣を伴ってエネルギーが集まり、エネルギー弾がお互いに同時発射をする。

ズドオオつと音がなると同時にトーマと男の後ろ側は激しい砂煙で覆われる。

???「ハッハア！！コイツア面白れえ！ただのガキじゃあねえってか？

聞かせてみなソイツを連中から盗んだ理由は何だ？」

男はトーマに尋ねる。

トーマ「別に欲しくて盗んだわけじゃない。女の子を助けたらコイツが、

勝手についてきたただだ。」

トーマはディバイダー996を見せながら男に答える。

???「女・・・?シュトロゼツクの事か?」

男はトーマに聞く。

トーマ「そう名乗った」

トーマは男に言う。

???「クク・・・ハハハ・・・そうかいそうかい」

男はニコニコ可笑しそうに笑う。

トーマ「何がおかしい!!」

トーマは男に向かって叫ぶ。

???「知らねえってのは面白れえもんだ。

テメエが手にしてるソイツが一体どんなシロモノなのか、それも知らねえでその部品を助けた!!

はぁッはッはッはぁ!! 凄いなとんだ馬鹿ガキだ。」

男は可笑しそうに笑っている。

トーマ「笑うな俺は質問に答えた。今度はあんたが答える。
7年前のヴァイゼン鉱山だ」

トーマは鋭い目つきで怒りの表情で男を見て大きな声で言う。

「???」「聞こえねえな」

男は言う。銃口をトーマに向けながら男は言う。

ドゴオンという爆音と共に周りに響くと同時にトーマの目の前が、爆炎で見えなくなって砂煙が起けると同時に嵐が巻き起こる。

トーマ「こんな炎と嵐で俺の故郷を壊したのはあんた達か」

トーマは鋭い眼光で男を睨みながら質問する。

「???」「聞きてえか? そうだろう? そうだろうなあ!」

男はトーマを見ながら叫ぶ。

トーマ達の戦いが2回目が始まった瞬間外にもリリイ達に黒い影が迫っていた。

12話（後書き）

今回はトーマが主に大活躍次回は主に敵が馬鹿みたいに出て来ます
トーマ達の運命は

誤字、脱字、読みづらい所と自分にアドバイスがありましたらよろ
しく願います。

次回もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9155r/>

魔法戦記リリカルなのはForce白き魔装竜

2012年1月14日21時55分発行